

第八章

殺戮

レ
モ
ン



静穏な日々は私たちの周囲にない。しかしないにもかかわらず、何と一見穏かそうに日々が過ぎてゆくことか。

そういう慣性的な流れのなかで、或る瞬間、不意に躰の奥底からつきあがつてくる名状しがたい感覚——、反逆とまで強くない切ることとはできないが、確実に慣性にさからっている衝動。単なる欲求不満ではない内省と批評を含んだX。それ——。

狂詩

世界の終りのまえに

■ なかやま・みきお

タバコが欲しい

タバコが欲しい

洗面器で 一パイ

洗面器で 一パイ

煙草 多葉粉 多波古

淡婆姑

エイ

エイ

エイ

ふるえる指先

皿という皿 まさぐつて

〔早く 早く〕

真 返魂煙 仁草 仙草

仙草

ヤア

ヤア

ヤア

灰 ふきとばし

紙 ひきちぎり

ヤニかっこみ かっこみ

量八枚 プン回す

〔お願い お願い〕

延命草 金糸煙 想思草

忘れ草

ポン

ポン

ポン

畳表を バコバコと

「アア…… そこよ そこ」

病みほうけた

タバコ狂いの目ン玉が

でんぐり返り

「アレ アレ アレ」

逆眼で オロ オロ オロ

こんなに吸っちゃあ

肺ガンに なるかしら？

「嬉しい 嬉しい」

ケエーイッ！

シャシャリ出るかッ

いらざる馬鹿念！

魔王の剣で

真っ向う 立ち割り 車切り！

またしても おれは言葉で

何をよびだそうというのだ？！

夜が来る

タカサゴヤ コノウラフネニ……と唄いつつ

ウソで固めた高島田！

色と欲とのしがらみに

ころげまわるは アヤカシどもの泣き笑い

惚れると見せては

逃げまどい

切れたと思えば

引きもどす

イカモノ同志のバケ競へ！

目を閉じての一回転で

誰でもなれる花嫁御寮！

すれちがいざまに 切り殺せ！

怨みばらしと祝言の

門出の血まつり！

これが則ち 色なおし

涙の盃 さんさんくどい！

血の婚札 終えたら すかさず嫁さがし

魔の初夜ともに迎える

おれの力カアはダレダーッ

あたりまえの女は抱きあきた

出てこい！

サアッ 出てこい！

ウヌらが肛門 めがけ

熱帯性奇癖をもつ

スプーンの接近じゃ

移動せよ！

移動せよ！

移動せよ！

せまりくるは

沸騰する

肉

の奔流だ！

あたり一面

茶褐色の水蒸気に塗りつぶされて

火蜥蜴は嬉々として泳ぎまわり

焼け死んだウヌらが屍肉

むさぼり喰らうぞッ！

オオ コレワ

人類の最期が覗ケル万華鏡！

闇の宿命^{きだめ}背負った妖婦^{おばけ}が
オレの望みだ
闇紋り血染めの金欄^{きんらん}緞子^{どんし}
骨身^{ほみ}もろとも
引き裂いてくれようかッ
ジタバタするな！
おまえは 刺青^{いばだ}を
総身彫^{そうみほ}りした香具師^{かぐし}と
寝たことがあるかッ
虚を裏切ったことがあるかッ
サアッ どうした！
すでに

灰血の中に生活する

肉

の律法化は

区画整理

を開始したソヨ

死の充満くぐり抜ける

百鬼夜行^{ひやくきやぎやう}の人間どもよ



マッ

カナ海ノ

タクサンノ死

人ガノッテイル白

骨デツクラレタ船ノマ

ワリニ落チテクルシカハネ

ヲ待チカマエテ群レルマトモナ

頭ト骨タケノ体ヲモツ魚！死者ガ渡

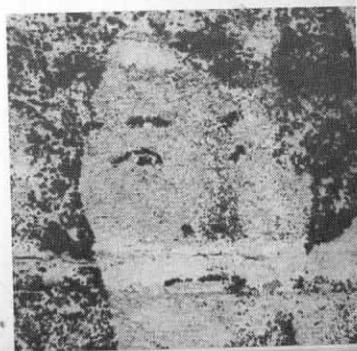
ル順番ヲマッテイル二本ノ丸木橋ガ力ケ

ラレタ直径1kmノ大釜カラ立チノボル血ノ

湯氣ニトリマカレ次々ト落チテユク死者トモハ紅

イ熱氣ニ体ヲトカサレテユク！水ビタシノ囚人服ヲ着

タ死人ノ行列ガ体ヲスクメテ歩イテユクブヨブヨシタ暗イ



ホラ穴ノ天井カラ血ノカタマリガボトボト落チソレニアタッ

タ死人ハ痛ガッテイタ！ヤガテ赤イ煙ニノマレテ消エテイ

ッタ胸ニ名札ヲブラ下ゲテナカニハ自分ノ首ヲモチ頭

ヤ手足ノナイ死者トモガコロガリナカラ進ンデユ

ク燃エル枯レ草ノ大地！スヘテノ花園ノ中ノ

一軒家ニハソコヲノゾクト自分ノ葬式ヲ

ヤッテイル家族ノ姿ガボンヤリ見エ

ル小サナ穴ガアイタケロイドノ

顔ガイッハイノ壁ノムコウ

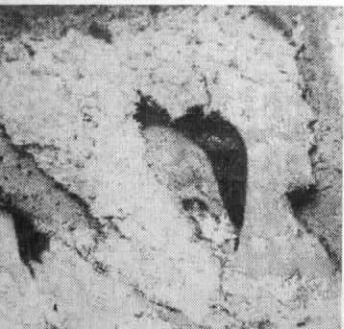
ニハ幽界ニツナガッタ

9999段ノ闇ハ

トノビテイル

階段ガア

ル？



世界は赤く見え 黒く見え

今となつては 弁証法は食後の祈り
三千世界を穿つ絶対零量の眼差し突き破つて
示現した飛行勇士も我誤れりという酸素欠乏
の溺死の状態

考える華ならぬ 宇宙の足だ！

ああ わが最愛なるトロッキーを

高らかに読み上げて

永遠の革命を幻視しつつも

すわやッ

われ立ちむかわん イザ イザ イザーツ

馬をひけ！ 馬を

スパークする裸電線でムチ打って

走れ

理想的壇家サタンの

高憎張り合わせて

いま走れ

古風群鳥の四次元夢想の

オーバーロードは光を放て！

アイヤッ 下弦の月を横切つて

無数の渡り鳥の突風は

女装して逃亡するソツ

ヤヤ なんと！

これが 眼球直立性の路面上で形態化された

鳥類の風俗かッ！

残るは奥の手だ一つ――

フッフ 発情器のスイッチを

三回半 ひねりだ！

漆黒宇宙を飛翔する

緑の眼 輝かし

純粹死量の急斜面で敢行される

白夜の死闘の切つ先

鳥類の墨汁で

克明に描写すれば！

オッ 生命線が

また 3ミリ ちぢんだ……………

殺戮レモン

■石上弘美

太陽はとめどなく笑い続けるバラのように
めくれあがった唇から吐き散らされる光の

唾・無数に貯まる夏の舗道

汗で密着した衣服が皮膚に溶け

裸で歩いているような快楽

勤続七年事務員のわたしは

レモン買いにいけます

正式な職務なのです

係長課長部長所長の決裁判揃って

レモン購入・P・M2時会議アイステイ用

果物屋△新鮮果実▽の古びた看板まで

数個の信号機・黄色灯は瞬間

勤続七年本俸四万円のわたしは
レモン買いにいけます

最後の信号機に一台のダンブカー

ブレーキ悲鳴を路上に叩きつけて

窓から身をのりだしたダボシャツにいさん

わたしが裸の快楽を歩いているのを

見破ったのは彼だけだ

―相手をしてやってもいいんだぜ―

――

―昼間でもかまやしないよ―

―何処へ行くつもりだったの―

―こわしに行くんだビルを、俺たちのありあまった力で町中がこわ

せるぜ―

わたしは手を振る

月曜日のオフィス・生ぬるい過去の時間が優柔不断にまつわりつ

く腐敗性未来の予測、退職金Ⅱ本俸×勤続年数、女房子供、カラー

テレビ微調整、受胎調整、墮胎技術向上とオトコの倫理、パンタロ

ンの洪水は血迷い速度で繁殖、すでに生産とは名付けがたく排泄物
の臭気となつて充満する大地にわたしは極度の貧血のため立ってい

られなくなる、

ほろへ、ほろへ

女の甲高い叫びと男の野鄙な忍び笑いとの交尾によつて生まれる明
日よ、ほろへ

つぶれかかった風景の涯、目を閉じること殺戮への確信は高ま
る、理想境をほんとうに望んでいるのならいまのかたちあるものす
べてをほろぼしてしまわねば、生産罪悪の根源、子宮めがけて爆弾
投げろ、マイホームの猥雑さを分婉した子宮を、少女の生産予備軍
子宮を、レモンのかたちした子宮を粉微塵に、レモンの使途は、女
たちの肌をほんの二、三年若返らせるのではなく、主婦の夕食前の
情事を後始末するのでもなく、

硬質の輝き

レモン爆弾による

レモン子宮破壊後

レモン理想境

わたしは目を閉じる、炸裂する子宮、火煙たちこめる中、札束や建

物はまたたくまに燃えつきるのだが子宮たちはひきちぎられてもなお生き濡れて生産を止さないだろうから油断はならない、ひとつひとつ粉微塵の無機質な灰に変えてしまわねば、殺戮の終ったあとは無限静寂の闇。

最後の信号機を渡ると

果物屋〈新鮮果実〉の古びた看板

女店員の肥った足腰

生産的な体格おしつけがましい笑顔

―なにをさしあげましょうか―

―レモンを

この町の女の数と同じくらい―

「あすか」 第一号

(昭和47年7月)

ミスター・モウスグ

■阿志津 みづえ

モウスグデス

幾度聞いただろう

駅の改札口で、医師の待合室で、食堂の椅子の上で

モウスグデス

あまり何度も聞かされるので

いち度そのモウスグという人に会って

とくと話をきいてみたくなつた

もうすぐもうすぐと仰言いますが

いったい何がもうすぐなのでしょう

彼は確信ありげに答えた

もうすぐ何かが始ります

もうすぐ何かが終ります

つまりもうすぐというのは

現在の状態を指しているのですね

じゃその何かとは何ですか

聞かれては困ることを聞かれたという様子で

彼はあちこちポケットをさぐつたり

ベルトの下に手をつつこんだりしながら

すべて終りは始めて

始めは終りのはじめで とりとめがない

すこしめんどろな気がしてきたので

その論法でいくと いずれにしても

駄目だということですねと念をおした

彼は突如として元気をとりもどして言った

わたしはそんなにペシミスティックじゃありません

ミスター・モウスグはやさしげに笑って語をついだ

そんなにいらいらしくなくても

もうすぐです

凶状記

信人

奈落の底へ陥ちこんだ、男の怨念、鬼火と化して、意地が地を這う地獄絵巻。どうせ勘者、故郷を捨て、巡り巡った鉄火場で、身にふりかかる血しぶきの、赤い辛さが目にしみる。人の情けも顧みず、闇に嵌ったかぶき者。粹がるつもりはございませんが、喧嘩の作法について、書かせていただきます。ひとつ、喧嘩の初めには「啖呵」

をきらねばなりません。よく巷で喧嘩真似なぞいたしまして、「やるのか！やるのか！」と大声で怒鳴る輩が居りますが、あれは敗犬の遠吠、みつともいいものではございません。亜米利加心理学者のワトソン先生によりますと、これを自己顕示の衝動と呼ぶそうでございます。はい、本当のことでございます。差出がましいようですが、フロイト大先生の学説に従いますと、喧嘩の夢は性交渉の願望を表わすそうでございます。喧嘩の際の異常な興奮は、オルガスムスであるそうでございます。そう云われてみますと、古来、男同志の喧嘩は表たつて行なわれますが、男と女の喧嘩は、あまり勧められてはおりません。それはその

はず、男と女が真昼間から、路上でナニをするわけにはまいりません。これがわかりますと、古の諺などなかなか意味深く味わうことができません。夫婦喧嘩は犬も食わぬ」はずでございます。男の方は既に、食へられておりますわけて……「死ぬ死ぬ」などと声が発せられまして、ここから喧嘩で死ぬとか、喧嘩は命がけなどと云われてきたのでございましょう。さて「啖呵」でございますが、流し「見知らぬ通りすがりの相手、もしくは、素人筋」相手の勝負なら、きる必要はございません。先手必勝、黙って殴りつけるのが、正調喧嘩道でございます。しかし、中には律儀な者も居りまして「それは卑怯でござる」などと、時偶

仰有います。こういう御方は、男と女の喧嘩のときも、「やらせていただきます。失礼いたしました」と大層礼儀正しいそうでございます。この様な場合は、ぐつと三白眼で相手を睨みまして、低い押殺した声で「かかってこい」と一言いいきって、身構えると、男らしく見えるものでございます。玄人筋の喧嘩になりますと、そのはまいりません。お互、尻の穴の毛まで知り合った者もおります。このときは「啖呵」はきちんときらねば筋は通りませぬ。急ぐ必要はございません、一言一言啖殺すよう、喋ります。

「男同志の勝負、承知だとは思いますが作法をさせていただきます。売られた喧嘩に買う喧嘩、ど

ちらも意地がございます。意地がかかったこの勝負、この場限りのものではございません。ここで命を落すか、さもないときはこの喧嘩、どちらか死ぬまで生涯続くものだと、御承知願います。

こうして「啖呵」をきりながら「間合」をはかります。「啖呵」は通常、一尺五寸（約四十五センチ）ほどとりまします。相手が攻撃をしかけるには、この「間合」を詰めなければなりません。そのためには半歩ほど踏みこむ必要があります。この隙を狙ってございます。隙をつくには「呼吸」が必要です。相手の眼を凝視いたしまして、息つかいから動きを察します。人は攻撃をいたしますときに、体がわずかに引かれ、息

を半吐ばかり吸いこみ、体の反動を利用して殴ったり、脚を後に引いてから蹴つてまいります。と同時に「間合」を詰めにかかります、この動きを感じて、こちらは後退り「間合」を保ちます。このために、相手の攻撃は空をきり勢あまつて体の平衡を失います。この瞬間、半歩「間合」を詰め、逆攻撃するわけでございます。これを俗に「呼吸」が合ったなどと云われて居ります。

攻撃を始めましたら、殴って殴って殴り殺すまで続けなければなりません。一度、手を休めますと相手は必ず反撃いたしてまいります。肉が裂け、砕けた骨が血とともに宙に舞うまで続けます。終わった後に、拳から腕、胸もとに

かけ返り血がべつたり付着するまで手を休めてはなりません。

ここでより効果的な殴り方と、殴る処を教授いたします。殴るときには必ず同じ処を幾度も攻撃するのが定法でございます。殴る処でございますが、恐怖感を与える処といたしまして、下唇の付根から顎の先端にかけての部分が一番でございます。ここを続けざまに殴りますと、唇は裂け、口の中の粘膜がずたずたに切れ、血が吹きだし、歯は欠けて飛び散ります。脳裏にずうんと響く鈍痛がいたしまして、気絶いたします。はい、これは実験済みでございます。

次に、一時的な痛さを与えるものといまして耳から顎の付根

にかけてを、鉄拳で殴るのが最適だろうと考えております。これには時折、思いもよらない付録がきます。鼓膜の破損というものでございます。何にしても膜が破けるといったことは痛いものでございます。また鳩尾など強打いたしますと、息がつまり、うつつと苦し気な声をだし、うずくまる場合がございます。相手を長いこと苦しめるは男として恥ずるべきこと、すぐに相手の顎を蹴りあげ止めをさせてあげなければなりません。その際、ぐわつと潰れる声をだし、血が吹きあがり、しばらく歯が根元から折れ落ちてくることが、たびたびございますが驚かぬよう心せねばなりません。

一発で相手を打殺そうとお考え

の御方には、拳をぎゅつと握りまして、体を弓のように張り、満身の力で相手の肩間を真直ぐ叩きつけることを、お勧めいたします。この場合、頭蓋骨の一部を叩くといった気持はけしてもつてはなりません。これは喧嘩道の仁義に外れます。何やら薄い板切れを割るつもりで殴っていただくのが一番でございます。

殴るときも、蹴るときも、基本となりますのは「腰をいれる」ということでございます。何につけても「腰をいれる」ということは重要なことで、暇を見つけては、何処ぞの誰かを相手に、ぐいぐい「腰をいれる」稽古を積むのが強くなるコツだろうと考える次第でございます。ただいればよいの

ではなく、激しく上下する（下世話に云うところの「ヒストン運動」）のは乱戦むきでありますし、相手がデキル場合には「おめし、やるな」と「啖呵」をきつて、ゆつくりじわじわ捏回すよう攻めるのが、常道かと存じます。古より、戦はすべて男が担ってきたということは、まさしく「腰をいれる」という行為が男の行為であつたからで、女子衆はせいぜい「腰をうかす」ことしかできないものでございます。

喧嘩におきまして「間合」へ「呼吸」について大事なことは、相手の強弱を見きわめることでございます。これは非常に難しく一概には云えませぬが、概して、弱者ほど大声をだしたり、怒鳴ったり、

相手の襟首を掴んだり、組手にもつていこうといたします。これは相手が恐くて「実力がわからなくて」先に殴れないからでございます。また、なんだかんだ、おちやのみずと怒鳴るのは、こうして時間をかせて誰かに止めてもらおうとする甘い期待があるからでございます。場慣れした者になりますと、有無も云わさず顔めがけて鉄拳が飛んでまいります。互に粹がたり、服を触つたりしているのは、双方、喧嘩の素人と考え

てよろうと存じます。ただ、例外がございます。ボクシングなど使います者の中に、いきなり相手の肩のへんを掴みまして、ぐいと引き寄せ顎の先めがけストリートを放つ、兵がおります。こ

れは超一流の玄人、夢夢、見縊ることなく「間合」をはかることが肝心かと思ひます。

さて終りに、昨今はやりのゲバルトについて、喧嘩道にのっとり一言、云わせてもらいます。

ゲバルト、特に内ゲバでは自分で「啖呵」をきらなくとも、リーダーと申す者が居りまして、「何とかファンサイ！凸凹勝利」とアジつてくれますので、ただただ、「ファンサイ！勝利！ファンサイ！」と叫んでおればよろしいのでございます。しかし、本番のゲバルトには、腹の底からわあつと大声で叫ぶ精力（声力でござらぬ）が必要でございます。このまつこと頼もしい雄叫びが「その昔」「ハリマオ」というテレビ番組がございま

して、この主題歌の中に「轟きわたる雄叫びは、ハリマオ！ハリマオ！……」といった部分がございまして、それを聞いたひに子供心に血沸き、肉滾る思いでございましてが、これと同じで」恐怖を払い、回りの者も自分も勇気つけるのでございます。

双方、激しくぶつかり合っている場合には、非常に白らけた思いを顔の硬直で隠し、遠くから腰を曲げて「俗に云う、騎乗位、あるいは、屁放腰」長い竹ヤリを出しておればよいのでございます。相手が崩れたたとたん、前線におどりで、敵の本隊ではなく、逃げ遅れてきた青年を徹底的に、憎悪のかたまりと化し、逆上して

一番重くて固い角材で殴りつけるのが喧嘩道でございます。

頭が割れて、血がどつと地面に流出するなかで、黄色い生臭い膿とともに脳味噌が溢れるまで殴りつけ、人が集まって来たら、さつとひきあげ、さめざめと醒めた感じで、ホットパンツの可愛い娘に敵の返り血をみせびらかさねば、一人前の男とはいえないのでございます。

グロテスクなアナウンスと同時に、機動隊のあんちゃんなどが来ましたら、御上に楯突くことなく、ぼいと頭のヘルメットを捨て、手にした角材を何気なく落し、平坦と一般大衆、一般学生の中に紛れ〈カエレ！カエレ！〉などと叫ば

ねはなりませぬ。これは決して恥ずかしいことではございません。

さてさて、思えば阿漕な一生でした。いまさら神仏の救いがあるわけでもなく、この身を灼熱地獄に焦がすだけでございます。それとて慣れれば温く感じるものでございします。失礼つかまつた。

（「摩羅樹」一九七一年八月号）

12時はんにとたへよ

■浅田 賢

とっても大きな船だわ

ウーッシヨ

むにやくむにやく

かんだかい べ べ こしましか

水が考えるノルマのノルマ賃

ゴキブリ銘 行くぞ

ヤ 8

へなちよこ小豚 ガベモシメ

うっしら横須賀ななこぎれ

どぼてぶぶくぶき とびさけ

あてりあてり「待ってくれ」

なぜだい どうしてどうしてなの

しらないかつらしつかりつけ

「あら ほんト…みたい」
けつをわ はやくしろめ!

酒がながれるこぼれ島
からすひしめく夜ぐ橋

キーク キーク よみねず み
ほびせやなせくくりし よ

ミチミツミチミツ――

あすかくませどとくめき

くさせよもきくくみとし

はしらへあしまくあそかを

べべり立ついみ匙さきおしび

くしめく並ぶかどいつくと

げしようく簿記のあかめ板ぞぐ

ね。!! もか? ―― 「こきゅう」

さぞかしおくれよ

れりろろまく

くつち

だびてべぞごばぎ

いぐだしおくらしいたしふねおとから

こころしか掛けからかさだけえだけ

かきわかきこそばいりんそう

よろこびすぎるはいりますはたらきすぎる

きそおえかてん似二あげて

つらたかったしくわすぎみじかったしか

かった

てぼらすか!

てぼらすか?!

よつよつ

びび

そるくんせい蟹に腹あけわらわら

としばくばくはさめ メメモ

ちゅう

「図書の虫干しのため 市立図書館は10月31日
より3時まで休みます。」



赤い提灯

■竹内正企

服を なめにくる ざらりとした牛の舌は
何処にある
ひれ ひれ と刻まれた臍物
ミノ テン タン レバー センマイ バラ
鉄鍋のなかで ちぢみあがり
にんにくの 匂いをさせて
胃袋に たまってゆく

たべられてしまう

こま切れの ホルモン

かみしめて たべはしめる この食慾に

盃が ころげてゆく

猥談が 煙とともに たちのぼり

悪霊のような 赤い提灯が ゆらぎ

ぼくの顔を そめてしまう

地下工作社作品発表其二

■夏輪絹

プログラム

※精神↓大衆を敵とせよ！

※劇が詩か絵か音か太陽か！一斉は暴力に他ならない。

プログラム1 国家・コーラを飲もう！

プログラム2 ハングリーアングリー

プログラム3 減るメット

プログラム4 マン・オン・ステージ

プログラム5 「ボール！」「ノー」

プログラム6 詩、シー、死

○ここに於ける台詞は肉体的言語をもつて臨まねばならない。この為には行動者たちの日常性が問題である。○会場、又は、空間。それは室内であつても屋外であつてもよい。

○そこには贈答品の詰合わせに仕込まれているハッポースチロール、ビールのケース、懐しき小学時代の椅子等々があつて、このイヴェントの参加者はそれらに坐わる。

1

予定時間になると、学生運動家のスタイルをした数人がコカ・コーラを持って現われる。

「コーラを飲んで町へ出よう！」

「コーラを飲んで火炎ビン作ろう！」

「コーラを飲んで国家を倒そう！」

「みんなで国家・コーラをのもう！」

行動者たちは事前に「国家・コーラ」のレッテルを貼ったコカ・コーラの栓を抜くと、浴びるように飲み、参加者にも「国家・コーラをのもう」と云いながら配つて歩く。

2

行動者たちは空腹でなければならない。故に、このイヴェントにあつての前三食は控える必要がある。真に怒れる者は空腹者でなければならない。

「われわれにあるのは怒ることだけだ！」

「青春は怒れる時代だ！」

行動者は激怒し、秘めた罵声を浴びせ、その会場は罵声で漂う。

「天皇を殺せ！タナカを殺せ！民を殺せ！」

3

怒りきつた行動者たち、その場にヘルメットを投げ捨て、そのヘルメットは黄であり白である。転がったヘルメットにトンカチで一撃。その一打でヘルメットは割れ、裂かれ、ヘルメットの形はなくなり、減るメット。

4

散らばった破片。行動者たちは参加者の坐わっているハッポースチロール、ケース、椅子を一ヶ所に運び、思い思いの唄を口ずさみながら、ステージを築く。

そのステージの上、男は逞ましく立ち、それは幻の英雄。名は「ボール」。女、髪を振り乱し、「ボール、ボール、ボール」と迫まるが「ボール」は「ノー」と無視するだけである。「ボール」と「ノー」のやり取りが続く。

※女のマ性に「ボール」はどこまで耐え続けるかの実験。

又は、ざわめいている参加者に向かって、制する。できるだけ嫌味つたらしく。
すべての者が終えると、ステージは崩れ、その下敷に、その上に息たえる。この状態は参加者がすっかりいなくなるまで放置されている。

適当な時間が経過して「ボール」II 幻の英雄は、一篇詩を詠み始める。すると行動者たちは「シー」と制するが止まらず、詩は続く。その後、女、行動者とひとりに、自分の詩又は一番お気に入りの詩を詠みあげる。しかし、他の者は「シー」と朗読者に向かって、

（「血乱死」その4 一九七二・九・一七）

いんたびゅう「稲木豊実氏の現代」自問自答

■稲木 豊実

——詩と貴方との関係を端的に云うと？

隷属関係。食欲と排便の関係。主従は常に変化しているけど。

——話はちよつと文学からかけ離れますが、革命の可能性についてはいかがです？

日本において？ そう、まず九十九%不可能に近いんじゃないかな。どうしてもインフレでマイホーム主義者どもが中流階級気取りしているとね。それよりも、右翼の台頭の方が可能性濃いんじゃないかな。現実には右翼は左翼ほど弾圧されていないし、それに権力者側にすでに多く入り込んでいるから。

——それではまた月並な質問ですが、学生運動全般についてはどうごらんになっておられますか？

否定できないことは確かだね。だけど、そのまま肯定もできない。今の状態は料理屋のメニューと同じでいくつでも色がそろっている。何か気に入って飛び込んだら「ワナ」だったなんてことも考えられる。よくよく注意しなくちゃ。でも、容認と云うより黙認はする。結局、どれが正しいか見きわめるためにね。権力側の分断工作はうまくいっているよね。

——自分の存在をどう認識していらっしゃるんですか？
これはむずかしい。しかし結局は生きると云うことに真剣になることだろう。私の場合、真剣になんかなれない。一日中一年中、真剣になつていたら神経衰弱になつてしまう。これはしゃれてはない。一日のうちで一度でも真剣になる瞬間があればそれで

生きている証しにはなると思うが、これほど情報網の発達した現代にあっても感覚がマヒしているんだな。学生運動・労働運動・ギャンブルをやる連中の気持はわかる。その意味では猛スピードでとばした車が衝突して死ぬなんてのはひとつの幸せかも知れない。

終り

坂

■北見 哲哉

ぼくの住んでいる町に

長い坂道が一本ある

少年だった頃

夜ふけにこの坂道を登っていくと

残業で疲れきった男や

泥酔した男が

呟やいたり唸鳴ったりしながら

ジグ・ザグに登っていた

ぼくは獣みたいだと思っていたながら

小走り追抜いたものだ

やがてぼくも

夜ふけに坂道を登っていく

男たちの仲間になった

そして獣のような声が

男たちの暗い底からわき出る

言葉だと知った

だが一体誰に問い話しかけるのか
おかしな男たちだと
若いぼくは思ったものだ

ある日のことだ

残業を終え安酒を飲んで

坂道を登っていくと

どこからか語りかけてくる

声が聞こえてきた

ぼくは返事をする

話しあいながら坂を登り続けた

やがて何気なく横をみると

誰もいないのだ

前にも背後にもいないのだ

いまはこの坂道に

何者かがいると

ぼくは信じている

謹賀新年

■玉岡 松一郎

一月五日に税務署に行った

一月四日が日曜日だったので

一月五日が御用はじめだったから

源泉課税を納めに行ったのです

税務署の方は困っておられました

去年も御用はじめの日に行つて

御迷惑をおかけしましたが

私の方にも都合があるので

税務署に行ける日はそうなのです

日曜日や祝日に行きたいのですが

税務署は休みだということを知っているからです

それで今年も私の都合で

私の全一の身上の都合で

税務署に行ったのです

税務署の方は言われました
もうすぐに式がはじまりますので
家で夜にでも書いて
届けて下さいと

五分開くらいですませる仕事なので
私はソロバンを借って

仕事をはじめたのです

税務署の方はまた言われました

もうすぐに式がはじまりますのでと

自民党は三〇〇議席を獲得して

幕の選挙で圧勝しました

安保自動延長はやすやすと目前です

自民党政府はアメリカのことを

気にしていらいしやるにちがいありません

自民党政府は日本の人民のことを

うっかり忘れていらいしやるにちがいありません

税務署の方は式のこと気がなっていて

私たちのことを忘れようと

していらいしやるにちがいありません

個人詩集「安保無情」より

第九章

木偶と王様